青いひまわり

merongree

ずっと生活から離れたところで呟くように地面を濡らしている
そんな彼女を侵略したり
名前を呼んだりするつもりはないって言いつつ
たまに会いたくなり眠っている扉を叩きに行くと
いま育児に疲れているのだと
彼女の人生から締め出され弾き出されて帰る
抱えていった満開の悩みはひしゃげ
それを咲かせるほどうるさかった
太陽の熱が散らばった花弁のうえ転がり出す
砕かれた光彩の上に凄く

月の引力だかに密かにつつかれ
お前はほんとうは誰の子だか分かっているかと
言われつづけて仕方なく地球全体を左の眼から落とせるぐらいに膨らんだ青い涙は
ほかのひとたちの悩みは自分の出生の秘密と同じほどには苦しくあるまいと奢って
何でもかんでも口に入れてしまいその見境のなさは頑なな残酷さと見間違えられた

敵について想像をめぐらすことのできる
寿命の長い獣たちが陸の上には揃っている
彼らは
自分を食べる気のある敵から離れていることが出来るだけ
長く生きられる
そこで

自分たちの巣のそばを濡らしては去っていく
獰猛な海という獣についても
数をかぞえるみたいに穏便に考えられる
のどかな陸の時間というものを持っている

あれはきっと何かを滅ぼしたがっているのに違いないよという
まるで自分じしんに
放火しているみたいじゃないかとまた別の者がいう
あんなに広い巣のなかに座って
片っ端から雛を食う
その神経が分からないし観ていてやりきれないと別のがまた言う
彼じしんとてもうるさいので雛たちの悲鳴はみなひしゃげて壊れてしまってはいるが
彼じしんが実に大人しかったらどうだろう
とても僕たちはやりきれないね
あの幾万の殺戮の青いかがり火のそばで生きることなんか
出来ない
彼がうるさくて助かっているとまた別のが言う
あのさざ波をごらん
彼じしんの呻きに密閉されているあの生活の中で
あのさざ波ばかりは正直に彼が他人の目につくほどに漏らしている
あれが彼の正直さだ
彼は雛たちを食い殺すために引っこんでいるわけじゃない
自分で自分を食おうとしている
ただ口の在りかがどこなのか分からないだけなんだ
それで絶えず自分の声がする方へ
自分の口元にむけて自分じしんをぶつけようと努力している
そして自分に当たり砕ける
彼は自分を食おうとして唾液を垂れ流しているだけ
そしていつまでも彼の口は閉まらない

彼の呻きは止むことがないだろう
彼が自分じしんをその口の中に収めない限り

私は服従するみたいに眺めている
そのくせその単調さ傾斜のなさを軽蔑している
あの膨大な幼稚さ
まるで彼じしん
彼を変形させようとする者
彼を非難する者たちを
防ぎ踏みとどまらせるための
青くて長い堤防になっているようだと思う
いつまで産声は続くのか
内気な殺戮をごまかしているためなのか
雛が憎いのか
彼じしんはそんな殺戮を日々してのけていながら
ちっともそれが顔にならない
いつまでも名付けられることのない膨大な青い脂肪
産まれたままの柔らかい姿で
どことといって己に化粧しない
どことといって己に角も立てず
自分の足の形すら想像してみたことがなく
履く靴すら選んでみたことがなく
つま先さえも矯正されたことのない
まるで妊娠し終わった若い女のように開いた
そうあることを誰からも仕方のないものと見つけられている赦された獰猛な緩い肢体を
なぜこうも考えなくてはいけないのかと思うぐらいに憎みつつ
彼がいまだに続けている進化のない産声を
灯火が濡れることのないようにと思うみたいにじっと眺めている

その緩い輪郭の上に滑り出した私の小さな怒り
記憶の底から引き揚げられた矢尻を従え
私の声で鎧われた硬い船体を持った私の考えがいま
白いギロチンのような帆を上げて走り出す
青い脂肪は震えながら
自分を産み落とした月の下腹部をこわごわと映している
また服従した鏡になる
私の黒々とした金属製の考えが滑っていたあとには
船体になぎ倒された彼の産声が赤道ほども長くえんえんと続いて行く
しかし私の打ちひしがれた
私の硬い意志に踏みつぶされた
私が黒々とした金属に仕立てられなかった無数のゆらめいた感情はこの産声と手をつなぐ
私たちが手をつなぐときにそれは真っ白な角になって起こる
それが陸からめざとい獣に見つけられる
産まれながら母に似ている守られた獣たちに

いつまでも続く産声を言葉に仕切ることのできない
意志に踏みしだかれている私たちは心中した水死体のように
他人から見たら目を覆いたくなるぐらいに仲が良い
互いに碇を下しているみたいに密着してひとつの安堵した殻のなかに潜もうと
不謹慎なぐらいに不謹慎なところに安堵した巣を営もうとしながら生命を毎秒手放して漂っている
互いに母体に無縁になった
母体から締め出されている者どうし
母のようなものの代わりに自分に似た
共に創造性を失っている者の身体にすがり密着し
私のあきらめほど長く続いている水平線
それが終わるだろうところまで私はこんな名もない獰猛な幼さと日々
遠目に見つけられる白い角を立てながら延々と心中している

第十回文芸思潮　現代詩賞

ペンネーム　meron gree　読み仮名　メロングリー

プロフィール

神奈川県生まれ。東京大学文学部言語文化学科卒業。ツイッターアカウント :merongree